

宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319
FAX (0198) 31-2320

銀河鉄道の夜と大正盛岡

絵本画家 田原田鶴子



私が絵を描いた『銀河鉄道の夜』（偕成社）が出版されたのは2000年になります。今から25年も前かと思うと時の流れの速さに驚かされます。その後、版を重ね、韓国版、中国版も出版され、多くの方に読んでもらえていることをとてもうれしく思っています。

絵を描くことで、ジョバンニやカンパネルラとともに星座をめぐる銀河の旅をすることは、本当に幸せな時間でした。賢治の描く世界はどこまでも美しく切なく感動的でした。そして非常に具体的にビジュアルなのです。たとえばケンタウルス祭の街の情景です。

「空気は澄みきって、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街灯はみなまっ青なもみや檜の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタナスの木などは、中にたくさんの豆電球がついて、ほんとうにそこらは人魚のお宮のように見えるのでした。」

人魚のお宮っていったいどんなでしょう。もみや檜の枝で包まれた街灯は青い光を周りに放っているでしょうか。豆電球で飾られた六本のプラタナスの木はクリスマスツリーのようにきらきらと輝いていることでしょう。

ケンタウルス祭のような星祭りがあったらどんなにか素敵だろうと、私はあこがれの想いを込めて絵を描きました。イーハトーブ・モリーオ、盛岡を舞台として設定し、遠景に南昌山のシルエット、丘の上にはハリストス正教会も描きました。天気輪の柱の丘のモデルは岩山という丘陵地から

の夜景です。アルビレオの測候所はかつての盛岡地方气象台です。どこか海外の街がモデルですかと聞かれることもあります。賢治の生きた大正期のハイカラな盛岡の街を、私自身の心象風景と重ねながら賢治のイマジネーションに並走して描いています。

ただひとつ、どうしてもよくわからないことがありました。

子供たちが持って歩き、川に流す「烏瓜（カラスウリ）の灯り」のことです。秋の藪によく見かけるオレンジ色の 烏瓜では小さすぎて火を灯すと燃えてしまいました。実際に私はやってみたのですが、ある程度の大きさが必要です。また青い光を放つ烏瓜は、旧暦の七夕に青い大きな実をつける烏瓜でなければなりません。いろいろ調べたり、農業試験場に問い合わせたり、学校の先生に聞いたりもしましたが、なかなかわかりませんでした。しかし、賢治が青い烏瓜の灯りと言うからには、必ず大きな青い烏瓜があるはずです。

ところが、思わぬところからその答えがやってきたのです。私の個展によく来てくださった佐々木大助さんという盛岡の古老が教えてくれたのです。佐々木氏は大正盛岡を克明に記憶されていて、かつての盛岡の様々なことを目に見えるように教えてくださいました。盛岡タイムスなどに貴重な記事を連載されてもいました。

そこで私が烏瓜の疑問をお話すると、次のようにお答えくださったのです。

「私が子供のころには、盛岡の城南小学校の垣根に大きな烏瓜の実がたくさんなっていました。七夕の夜にその烏瓜の中身をくり出して、下から割り箸を刺し込んで穴を開け、そこにカメヤマローソクの1号5（10cm）を入れて火をつけます。果皮を顔のように削ったりもしました。まだ街灯も少ない盛岡の暗い夜に、みなで持ち歩いている青い灯りは本当にきれいで、まるで童話の世界にでも入ったような気がしました」

佐々木さんは図解までして「烏瓜の灯」の作り方を教えてくださいました。

私は息をのみました。賢治はこの情景を見たに違いない。大正時代の暗い盛岡の夜、田んぼの水面に映る子供たちの烏瓜の灯りの列。美しいものが大好きな賢治の目にはさぞかし感動的に映ったのではないのでしょうか。

それ以来、私は賢治が暮らした大正期の盛岡を

もっと知りたくなりました。

図書館から集めた古い白黒写真などを資料に、「賢治の愛した大正盛岡の情景」シリーズとして数多く描き続けています。

岩手県公会堂の前にあった白亜の「旧県立図書館」、目も覚めるほど美しいターコイズブルーの天蓋を持つ「四ツ家教会」、お祭りには欄干に祝いの電灯をともしというかつての「与の字橋」、賢治が森荘巳池を連れて行った旧盛岡劇場前の西洋レストラン「大洋軒」など、まだまだたくさんあります。

現在も盛岡の町には明治・大正期からの素晴らしい建物が点在していますが、残念なことに多くは失われてしまいました。ハイカラ好きな賢治が楽しく歩いたであろう当時の盛岡の街を、私はこれからも絵に描くことで残したいと思うのです。



▲与の字橋夜景

星を結ぶ —100年後の農民芸術概論綱要

八燿堂主宰・編集者 岡澤浩太郎



種を蒔こうと畝に穴をつくった指が、爪の先から微生物に侵食されて徐々に土になっていく様子を想像する。指から体全体へ、皮膚も、肉も、骨も、はらはらと解けて、砂粒より小さくなって、風に乗って飛び、雨に含まれて落ち、土に沈む。やがて大地と、星と、ひとつになる——。森の奥から風が吹いて、私は袖で汗を拭った。

本をつくる仕事を通して芸術の世界に片足を

突っ込んだ私は絶望していた。15年ほど昔の話だろうか。その頃、もてはやされる芸術はいつも都市で生まれていた。感性よりも思考を競い、資本主義と巧みに添い寝することでダイナミズムを増長させているように見えた。しかし、食っているようで食われているような、拗れた知的ゲームのようだった。次第に心が冷えていった。

数年してパーマカルチャーと出会い、循環型の暮らしを自分の手でつくれることを知った。取材で訪れたアメリカ北西部、オーカス島の農場は初秋の収穫時期を迎えていた。覚えきれない種類の、有り余るほどの果実が、採れきれずにぼたぼたと地面に落ちている。「ダメになってしまうから、お願いだから食べて」と差し出された実は、涙が出るほど美味しかった。真実だと思えた。

人間の営みとは何だろうかと考えた。人は合理的で効率的な経済を追求する過程で、確かに生産性を高め何らかの美も生んできたが、かたわらで地球も生命も精神も傷つけてきた。私には鉛を飲み込んだように違和感が残っていた。それが人間の導いた結論なのか。ならばあの農場の豊かさの理由は何なのか。美とは、生きるとは？

『なべての悩みをたきぎと燃やし

なべての心を心とせよ

風とゆききし 雲からエネルギーをとれ』

答えを探して文献を漁るなかで「農民芸術概論綱要」と出合った。きっかけは適当に「土」「農民」「芸術」辺りで検索したのだと思う。宮沢賢治が著者だと知り、賢治の童話すらろくに読んだ記憶のない私は警戒しながら頁を繰った。雷に打たれた。目が釘付けになった。土に触れる自らの手が宇宙の胎動と直結する壮大さ。自然とともに生きる行為そのものが未踏の芸術であるという宣言。芸術を、生きるということを、どこか悲壮感すら滲む高潔な確信のもとに謳いきっていた。答えはすでに書かれていた。

2018年、耳奥に木霊する賢治の言葉に押されるように、私は八耀堂（はちようどう）という一人出版社を始めた。内容面では時代に寄らない本質的な美や豊かさを、流通など事業面では200年後も持続し得る循環型の出版形態を、探求することを理念に掲げた。翌年には東京から長野の標高1000メートルの小さな集落に移住し、八耀堂の理

念と自分の暮らす現実を一致させるために本づくりと庭づくりを並行する生き方の実践を始めた。本を編むのも、土に触れるのも、同じことだと証明したかった。

『われらに要るものは銀河を包む透明な意思
巨きな力と熱である』

移住初日の夜、流れ星が降った。生まれて初めて見る満点の星空を、鮮やかに、真っ二つに引き裂いて落ちた。残像が消えると、千々の星たちが戻った。燃えている。ひとつひとつが自らを燃やしている。その炎が、私にも宿っていることを、私は知っている。命の炎。私は星だ。いつか舞い上がって銀河に吸い込まれるのだろうか。まるで体が土へと解けて、この星の一部となるように――それでも構わない。

けれども、私は私であることを止めないだろう。私という存在の、一個の命を燃やし続けるだろう。燃やし続けたまま、かたわらの星たちとともに銀河に砕けていくのだ。やがていつの日か、名も知れぬ誰かが、散り散りになった星を結んで星図を描くだろう。少しの物語と、音楽を添えて。

芸術とは、美とは、本を編むとは、生きるとは、あるいは賢治の言う「法」とは、そのようなものだろうか、星空を見上げながら私は想像する。

2021年、出会い頭に私の人生を決定づけた「農民芸術概論綱要」にいくつかの詩編を加えた賢治の詩集を、八耀堂から刊行した。いまとなっては資本主義や現代文明への嫌悪感は消えたとはいえ、私がそうだったように時代が求めているからだろうか、ありがたいことにロングセラーになっ



ているが、私の功績というより役割の順番がちょうど回ってきただけのように感じている。ちょうど、というのはほかでもない。賢治は最後の行にこんなことを記しているからだ。

『畢竟ここには宮沢賢治一九二六年のその考があるのみである。』

1926年。つまり来年、2026年が、100年目にあたる。ずいぶんな出会い方をしたものだと思ひながら、重たい縁だと勝手に引き受け、仲間たちと何か事を起こそうかと考えている。これも星図だ。いまを生きるという物語であり芸術だ。次の100年後に、届けるための。

時を越えて

音楽家 佐々木 玄



岩手県花巻市に生まれ、小学二年まで家族と過ごしたその家は、今にも壊れそうな程ほろほろの借家で、真向かいには小さな神社と、境内が広場の様になっていて、そこで私たち三人兄弟は毎日遊んで過ごしていた。今思えばとても神秘的な空間で育ち、私たち家族はその神様に見つめられながら暮らしていたような、あたたかい記憶が心のひだにいつまでも留まってくれている。

藤沢天満宮、通称『天神さん』と呼ばれている神社で、岩手に帰省の際はいつも参拝をしている場所だ。

幼少期を花巻で過ごした私にとって、宮沢賢治という存在はとても身近で、学校の帰り道には、賢治が働いていた花巻農学校跡地に造られたぎんどろ公園があったり、街を歩けばそこらじゅうに賢治に関連する様々なものに触れる事ができた。補助輪の無い自転車に乗れるようになってはじめて、兄達とサイクリングに行ったのも賢治記念館だった。末っ子の私は泣きべそをかきながら必死で年長者達の後を追った。

学校の授業でも賢治作品に触れる機会も多い為、他県に幾度となく移り住んだ今になって思えば、この地域に住む人々には賢治の作品に触れる教育課程のようなものが自然と組み込まれている事に何となく気づく。それはどの土地にもある風土とも言える。

昨年、音楽家である私の元に届いたラジオの仕事の依頼で、宮沢賢治についての特番を作ってみないかという話があり、その取材の前に改めて賢治の作品を読み返すとともに、その為人を調べていくうちに、自分の中に幼少期から深く根付く賢治の思想みたいなものに気づくことが出来た。賢治

は様々な分野で研究を続けていく中で、そのそれぞれの見識が曼荼羅画の様に相互関係を持っている事を、ミクロマクロのレベルで知覚認識していたのだと思う。知識は万物への優しさに続く道で、彼の描く物語に出てくる生き物達の描写を見れば感じる事が出来る。

音楽活動を志し田舎から都会に移り住んだ私は、都市部での暮らしの中で、文明と自然の共存や、経済、政治、宗教、ありとあらゆるものの在り方について、多くの疑問を持ち、その結果、百姓になりたいという結論をもって東北へ戻り、今は宮城県の山岳地帯で古民家を直している。

そんな折で訪れた賢治関連の仕事を通じて、自分自身は感覚的に選択してきたものの中に、確かに賢治の存在を感じる事が出来た。それは温かくて厳しい、親心の様なものに近い。百の姓を持つという事は、様々なものに興味関心をもち、探求を続けるという事。今の社会にも、今の社会の百姓の形があるのだと思う。身体を悪くしたりして、数多あるやりたい事がなかなか進まず気を揉んでしまう時、賢治の「雨ニモマケズ」をどうにも思い出してしまう。その短い人生で、世を、自然を憂い、命の限りに研究と探求の旅を続け、他者の為に働き続けた彼が残したものから、私は今も力をもらっている。

遺してくれたからだ。賢治が遺し、それを大事にし続けてくれたひとたちのバトンなのだと思う。私はこの世界に何かを遺すことが出来るだろうか。昔に比べて、活字や他者の作品の世界に入り込んでいく事が年々難しくなっているのを自分自身に感じる。これは、情報社会が膨らみ続けてきた弊害でもあるだろう。街を見渡せば多くの人達が、細切れに分断された情報の中から、端的な結末と一時的な快楽を求めて四角い端末を見つめ続ける。

そんな今の社会を賢治はどのように思うだろうか。何となく、いつの世に居ても好き勝手に研究に勤しんでいる様が想像できる。

賢治が見つめてきたこの世界の続きを私たちも同じように見る事、感じる事ができる。賢治の作品だけでなく、賢治の研究を通して私たちが生きるこの世界に埋め尽くされた沢山の神秘や驚きに出会う事ができる。

どれかひとつでも実際に私たちの暮らしの中に、例えば何かを年単位で観察するライフワークなど

を見つける事が出来たら、それらの経験は必ずや人生をより良いものに変えてくれるだろうと思う。私が幼少期を過ごした藤沢天満宮にある筆塚の足元に、亀の石碑がある。

賢治の「ラジュウムの雁」という初期短篇綴に出てくる石碑だ。大人になってからその事実を知り、実際に小さな亀の石碑を見つけた時は何とも言えない感動が、身体中を駆け巡っ



たのを覚えている。

彼はある時期農学校への通勤の際、もしかしたら毎日のようにこの境内を通ったのかもしれない。彼が生きていたのは、私がそこに居た時代からたった数十年前の事だ。途端に彼の存在を身近に感じられ、その景色は私の中で、紛れもなく宝物になった。

いつのまにか賢治よりも幾らか年老いた私は、境内の杉木立から暮れていく空を見上げて、辺りを見回して、その面影をどこかに探した。

彼が作品や岩手県内各地に遺した足跡には、賢治自身が、時を越えてかけてくれる、魔法がある気がしてならない。

それぞれに、それぞれの魔法を。

結い — 賢治が繋ぐ心と心 —

そういう者に。

グラフィックデザイナー 斎藤未羽



「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいからわたしがえらいんだよ。」—これは「どんぐりと山猫」内の台詞で、私が幼稚園の時の生活発表会(劇)で担当した一つの台詞である。

大人になった今でも鮮明に覚えている。

「どんぐりと山猫」は賢治作品の中でも有名な童話で、ある程度どのようなストーリーであるか知っている方も多いことだろう。あらすじとしては、それぞれの個性を持ったどんぐり達が口々に「一番丸いのが偉い」「最も大きいのが偉い」「尖っているのが…」などと言い争い、その「誰が一番偉いか」という論争を解決すべく、主人公・一郎のもとに山猫から裁判の立ち会いの招待状が届く…といった内容である。私は幼い頃から身長が高かったため、その当時は幼心に「大きいからこの役に抜擢されたのだろうな。」としか感じなかった。ましてや「誰が偉い」などという発想にも及ばず、台詞の意味も劇のストーリーも理解していないままに役を全うし、満足していたのだと思う。5歳

の頃であるから当然だ。

歳を重ねるにつれ、団体に属したり様々な人との関わりが増えてくる環境のなかで、地位や名誉、“偉さ”が切り離せない関係となってくる。無論、経歴や役職等で偉さがはかられることもあるだろう。しかし、小さな世界の中で「～だから私が一番偉いのだ」と競い合う、そんな大人もいたりする。そのようなことが起きると、大抵平穏には収まらない。

そんな時、どんぐり達の論争をふと思い出し、改めて大人になってから「どんぐりと山猫」を読み返してみたのだ。作中で一郎は「このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちゃくちゃで、まるでなっていないようなのが、いちばんえらいのだ。」と言い放ち、誰ひとりどんぐり達を傷つけることなく納得させ、愚かな争いを収束することに成功したのであった。

これは一郎の、子どもならではの柔軟なユーモアを含む純粋な優しさからくる解決策であると感じる。賢治さんの、人々を想う心、平和に対する優しい想いが一郎へ反映されているのだろう。そういった賢治さんの人柄が物語を紡ぎ、世界中の人々の心へ直接届ける。そして、今日も誰かを勇気づけたり笑顔にさせたりする。

そういう者に、私もなりたい。

「ほんとうの百姓」をめざして

有機農家 宮崎美穂



私は静岡県で、夫と二人で有機農業を営んでいます。ヘチマやレンコンを中心に、年間15種類ほどの野菜を育てています。

私の人生には、いつも宮沢賢治が寄り添ってくれていました。初めて出会ったのは小学生のとき。

読書感想文はいつも賢治の作品で、進路を決めるきっかけも賢治でした。

農家になりたいという夢を抱きながらも、なかなか踏み出せなかった私が、本気で就農を決意したのは東日本大震災のあと。自分の本当の願い―「農業を通して、ほんとうの幸せを見つけないか」―を胸に、畑に向かうことを選びました。

それは偶然にも、賢治が「ほんとうの百姓」を志した30歳の年と同じタイミングでした。

当時、私の背中を強く押してくれたのが「農民芸術概論綱要」です。そこには、自然や農の営みこそが芸術であるという思想が息づいています。

ナスやキュウリの多様な実り方、支柱に絡みながら花を咲かせるヘチマ、葉の絨毯からすっと茎を伸ばして咲くレンコンの花。収穫後に畑にずらりと並ぶ人参や、耕した土に舞い降りる鳥たち。季節で変わる虫の声と、毎日違う空や風。農の風景は、まさに生きた芸術です。

そして長年吹いてきたクラリネットも、賢治のチェロのように、私の中の創造の一部として生きています。

けれども、自然はいつも優しいわけではありませ

..

ん。賢治が冷害や日照りに苦しんだように、私たちもまた、猛暑や暖冬、集中豪雨に振り回されています。

100年たった今も、「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」ているのです。

もし賢治がこの時代に生きていたら―。きっとあちこちを歩いて豪雨のデータを集め、気候に合う品種を探し、肥料設計や土壌改良に取り組んでいたことでしょう。賢治らしく、誠実に、そして熱心に。

新規就農から10年。うまくいくこともあれば、どん底に感じる時もありました。そういう時はいつも、賢治の言葉に支えられてきました。「グスコブドリの伝記」「ポラーノの広場」「稲作挿話」賢治の理想の世界に触れるたびに原点に戻れるのです。

これからも農業を通して、「ほんとうの幸せ」を探し続けていきたいと思っています。

米価の高騰や後継者不足など、農業の未来が問われるいま、自分はどう生きたいのか、何ができるのかを、あらためて見つめなおしています。

そして、詩人、童話作家、教師、音楽家―多面的だった賢治のよう



に、私も、畑で働き、楽器を吹き、暮らしを慈しむ農民として、鳥のように、心の歌を響かせていたいと思うのです。

.....

■ 宮沢賢治記念館来館者 800万人記念セレモニー

令和7年8月2日土曜日、宮沢賢治記念館の入館者が800万人に達成しました。800万人目の入館者は、新潟市の樋熊さんご夫妻とふたりのお孫さんと、今回初来館。文学好きのお孫さんの希望で東北地方の文学施設を訪れているそうです。セレモニーでは、記念品として「木偶乃坊（デクノボウ）こけし」と「銀河鉄道の夜」の直筆原稿一葉の複製が贈られました。



■「賢治の世界」セミナー 2024

令和7年で15年目となる「賢治の世界」セミナーを、花巻市内の小・中学校、高校を会場に開催しています。花巻東高等学校では、朗読家の岡安圭子さんを講師に迎え、「賢治先生と朗読旅」というテーマで講話と朗読を頂きました。三重県出身の岡安さんは、2015年から都内で朗読教室ウツクシキを始めました。さまざまな作家の物語を朗読しながら「声を発する/聴く」楽しさを伝えています。2020年からはオンライン朗読教室を始め、月ごとにひとつの宮沢賢治作品を朗読する「賢治コース」で、これまでに50点を超える作品を扱ってきました。また、2021年より無印良品くらしのラジオ（spotify）でWEBのコラムと「人と物」シリーズを朗読されています。宮沢賢治作品を「声に出して読んでみる」ということが、作品を楽しむことに留まらず、人の生き方に影響を及ぼす力があるということを教えていただきました。「宮沢賢治を好きな人もそうでない人も、一度読んでみてほしい。そして何年先でもいいので読み返してみて。その時の自分がどう感じるか、それが面白いのが宮沢賢治という人の作品だと思います。」岡安さんは静かにそう語ります。

**■「賢治の世界」ワークショップ2024****5/24(土)「風の又三郎」ゆかりの遠野を訪ねて**

25名の参加がありました。遠野文化研究センター研究員の菊池弥生さんを講師に迎え、賢治が教え子の沢里武治に宛てた手紙の内容と童話「風の又三郎」のモデル地について、遠野市立図書館ホールにて講話後、バス移動で実際に賢治と沢里が歩いた道を辿りながら縁の地を探訪しました。

午後はとおの物語の館を見学し、語り部の昔話を聴講。菊池さんは午後も同行して解説してくださり、賢治の時代の古い壁材が残る旧千葉時計店の案内や、帰りのバスに同乗して沢里家の家屋とその真向かいにある高瀬露の嫁ぎ先の小笠原家、遠野高校にある賢治の胸像を紹介してくださいました。



▲仙人峠にて旧沓掛教授所跡地を見学

6/21(土) 宮沢賢治ゆかりの矢巾・南昌山を訪ねて

21名の参加がありました。矢巾町国民保養センター支配人・廣田昭夫さんを講師に迎え、盛岡中学時代の親友・藤原健次郎の人物像を学び、南昌山周辺のゆかりの地を探訪しました。午前中は、賢治と健次郎がのろぎ石や水晶を拾いながら南昌山を目指した道をバスで辿り、南昌山登山口にある幣掛の滝と南昌山神社を見学しました。午後は南昌山水辺の里にある賢治歌碑と賢治が遊びに行って宿泊したという藤原健次郎の実家を見学しました。



▲南昌山「水辺の里」にて宮沢賢治歌碑見学

7 / 5(土) 賢治の世界ワークショップ

— 賢治ゆかりの外山牧場を訪ねて —

19名の参加がありました。外山御料牧場・開拓研究会の中村辰司氏を講師に迎え、外山牧場と賢治の関係を解き明かしながらゆかりの地を探訪しました。午前中は盛岡八幡宮、上米内駅、天峰山9合目（深い霧と冷涼な高原の気候を体感）、外山畜産研究所、外山神社を巡りながら、盛岡から外山牧場に至る道や外山牧場が開かれた理由について説明して頂きました。昼食は賢治も食べたかもしれない外山そばに舌鼓。午後は外山御料牧場跡地を散策しながら牧場が辿った歴史を紐解き、帰り道に天峰山9合目を再訪（霧が晴れ午前中とは違った岩手山と盛岡の街を見渡す絶景を堪能）、最後に常光寺を見学しました。



▲天峰山の9合目にて

《特別展》のお知らせ

◆特別展

▶「よだかの星」

期間：令和7年10月4日(土)

～令和8年2月15日(日)

会場：特別展示室

「よだかの星」は賢治童話の中でも愛読され、取り上げられることも多い作品です。「よだか」は醜いゆえに他の鳥から嘲られ、蔑まれるという設定で、切羽詰まった心情の末、他の虫を殺すことによって生きるのがつらくなり昇天を決意します。学校の教科書にも掲載される作品ですが主題をどのようにとらえるかが難しい作品でもあります。この作品が書かれたのは、家業である古着商・質屋を継がず自分の新しい生き方を模索するといった賢治自身の心情が不安定な時期でもありました。

よって、この作品には賢治の生き方としての強い願いや祈りが込められているとも考えられています。作品が書かれた時期の背景等も紹介していきます。

展示資料：直筆稿「よだかの星」16枚、

映像「よだか」(海津研 氏)

直筆稿の公開

①10月4日(土)～10月13日(月・祝)

②11月1日(土)～11月9日(日)

③令和8年2月7日(土)～2月15日(日)

▶「村童スケッチ」

期間：令和8年2月21日(土)

～5月31日(日)

会場：特別展示室

賢治の童話には、作品の形態によって自らで分類を試みたと考えられる作品がいくつかあります。それらは「寓話集中」、「花鳥童話集」、「西域異聞三部作」等といったものがあり、草稿、特に表紙題名とされる用紙に書き込まれています。その中の分類の一つに「村童スケッチ」とされる作品群があり、字のとおり、対象を村の児童として描かれたもので、後に「風の又三郎」に転用される「種山ヶ原」、「さいかち淵」も「村童スケッチ」の一部といえます。

これらの作品に焦点をあて、賢治が実際に見て描いた「村童」の姿を紹介していきます。

直筆稿の公開

①令和8年3月20日(金・祝)～3月29日(日)

②令和8年4月29日(水・祝)～5月10日(日)

※資料入れ替えのため特別展示室のみ閉室する日がございます。詳細は花巻市ホームページをご覧ください。

* 編集後記 *

絵本画家の田原田鶴子様とは、以前からご縁がありお会いしたことがありました。宮沢賢治作品のイメージにぴったりというだけでは物足りないくらい、ほんとうの景色に近い絵をお描きになる方だなと感じ、それからずっと憧れています。宮沢賢治さんが生きていて田原様の絵をご覧になったら、きっと飛び上がって喜んだのではないかと私は思うのです。「賢治さんが楽しく歩いたであろう当時の盛岡の街」を思い浮かべながら、盛岡散歩をやってみたいと考えます。今回は特別に、通信の表紙に田原様の作品を使わせていただきました。(YS)